

【参考資料】第1回検討会議における議論の概要

■意見交換・協議（主な意見）

- 教育を取り巻く環境には、外から学校や子どもに寄せられる外的な要請と、学校の中から外へ向かって変えようとする内的な要請とがあると思われる。国の施策などにより、学校や子どもに寄せられる要請がどのような影響を振興プランに与えているのかという指標が必要であるのと同時に、一方でそれとは逆に、学校の中から外側に向けてどのような改革や発信をしてきたのかという指標が必要である。
- 子どもの貧困とも関係するが、家庭学習時間を見てみると、家庭学習ができている子どもとできていない子どもとの二極化が進んでいる。学校でも、家庭学習のための手引きを配布したり、まなび・生活アドバイザーが直接支援したりしながら、少しずつ家庭学習環境や生活環境の改善に向け努力しているが、学力向上のためには家庭での学習環境が大きな課題であると思われる。
- 小・中学校でも貧困状況など様々な状況から学力や学習時間に影響を与えている子どもがいるが、家庭環境における負の連鎖を断ち切るというのは難しい面がある。たとえば、夜間に働いている保護者に対して、子どものためにちょっとでも早く帰ってきてほしいと求めても、保護者は働かなければ生活できない。そういった現状を理解していかなければならない。
- 学力も向上してきており、中学1年生の振り返り学習など、他の自治体の範となる京都らしい取組も行っている。しかし、一方で、学校間・地域間で学力の格差もあり、また、学力調査の結果を見ると応用力も弱い。これまで基礎に重きを置いてきたが、今後は伸びようとする力を伸ばす試みも必要なのではないか。
- 安心・安全について、たとえば、いじめの認知件数については数字だけを見れば京都は多いと論評されるが、実際には京都の子どもが「しんどい」「助けて」と声を出せる環境になってきたということを表しているように思う。また、重篤ないじめはなくなってきたが、軽度の「いじり」を受けている子にも目を向ける必要がある。
- 「社会総がかりで子どもをはぐくむ」とよく言われるが、これからは学校が地域に対して何ができるのかという地域貢献の立場から社会教育や生涯学習に取り組んでいくべきである。
- 世の中では偏差値や試験の点数が重視されるが、子どもは地域の人とふれあう中で「こんなことがやりたい」「こんな人になりたい」という目標をもって、いずれ、偏差値や試験の点数では計りきれない大きな貢献をするようになる。
- 「地方創生」とよく言われるが、子どもが自分の地域をどうしていきたいのかという議論に参画していくという視点が大事である。
- 企業では、情報の取扱いには非常に慎重であるが、やはり最後は一人一人のモラルが大事である。

- 学校でモラルやネットワークセキュリティについて教えている授業を見せてもらおうと、「あれはだめ」、「これは危険」など禁止の事ばかり取り扱っているが、いい表現も含めて個人情報やインターネット上に掲載してはいけないということが意外と抜けている場合が多い。たとえば、友達との関係において、「今日楽しかった」「ご飯食べに行った」などといった個人が特定される情報がインターネット上に出て行ってしまうということの危険性についても考えなければならない。
- 子どもに向けてだけでなく、教員や保護者にも研修を行うことが大切である。「わからない」「自分たちの時にはそんなツールはなかった」という大人の声こそが子どもにインターネット上の遊び場を与えてしまっている。
- 「スマートフォンはだめだ」という指導ではなく、スマートフォンの上手な使い方を教えることが大切である。PTAなども年に2回程度研修会などを行っているが、保護者などへの啓発も大きな課題だと思う。

《プラン改定の方向性》

- 少子高齢化が進んでおり、教育との関係を考えていく必要がある。少子化になった時にどのような国家像を作っていくのか、子どもの教育がどのようになっていくのかを考えなければならない。
- 最近、より深刻なのは多くの若い世代が親の面倒を見るという意識が低い。親の世代がそのまた親の世代の介護などを行っている場面を見ていない。「いずれ自分も介護の当事者になる」ということがイメージできず、誰かが解決してくれると考えている。自分の親だけでなく、若い世代が上の世代の介護に関わっていかなければ社会は支えきれない。中高生のうちから、介護が尊いことであり、よい勉強となるということを教え、積極的に貢献したいと思う意識付けを行うのがよい。
- 大学でも目標がないまま研究をしている学生が多い。学生が研究した内容が、実際に社会にどのような役に立つのかわからないということがある。そこで、小中学生の頃は、将来の方向性と向き合うために基礎的な学習を進めるべきだが、大学に入るところまでには、やりたいことや、どのように社会に貢献するのかということを考えるべきであると思う。
- 小中学生の頃から、インターンシップとまではいかないが、実際の地域や社会に参加して、出会った大人に憧れたり尊敬したりする機会を持つことが大切。目標設定の仕方として、社会貢献という尺度が必要だと思う。
- 大学で自分の専攻していた学科と違う職場に就職して、やはり自分の思っていたものと違うために3年勤められずに辞めてしまう若者もいる。次の職場に就職しようとするけれども、それもうまくいかず、結局職を転々としてしまうということがある。大学を出てもやりたいことが見つけられていない。
- 社会には、一貫性のない転職を続けている者もたくさんいる。社会に出てなお、迷っているという人も多い。

- 少子化により、日本は世界的に例を見ないほど、大学に入りやすい国になっている。文章が書けなくても、挨拶ができなくても大学に入ることができてしまっている。府の教育として、読み書きや挨拶・人間関係など基礎基本のことを大切にしていけば、社会や将来のためになる。学校での基礎教育として、一人の京都府民として、「将来を担っていくために何をしたいか」「どう貢献したいか」を考え、話し合ったり、体験する機会を持つことが大事である。
- 小さいときに、教える大人たちが答えを拙速に求めてしまっている。じっと考えている子どもに「早くしなさい」と言ってしまいがちだが、「今まさに体験している」ということそのものを長い目で見守ることも必要。それが大学に入ったり就職するときに「これをしたかったんだ」というひらめきにつながるのではないかと思う。
- プラン策定時に「つながり」ということを深く議論した覚えがあるが、学校でも「つながり」を意識した実践が相当されてきたと思う。最近、小中学校に行くと子どもが積極的に挨拶をしてくれるようになったという印象を受ける。しかし、一方で大学などでも一人で昼食を食べる学生が多く、「(一人)ぼっち席」が増えている。行儀のいい子はたくさんいるが、メンタルな部分を含めてコミュニケーションについて考えるとき、「つながり」についての検証が必要であると感じる。なぜ、集団や社会の中で関係を作っていく力が落ちてきてしまっているのかという視点がいる。
- 今の子どもは目に見える形ではなく、情報でつながっている。
- 基本は顔を突き合わせて議論することが大切。すぐに情報機器に頼ろうとするが、それにより顔を突き合わせて議論する機会が失われている。
- 子どもが受け身であると感じることが多い。真面目なので言われたことはきちんとやるが、何か起こった時に自分で判断できない。能動的でない。国においても、アクティブ・ラーニングが議論されているが、これは非常に大切であると考える。他人が「何をしてくれるか」ではなく、自分が「何ができるか」という主体性を培う機会を作っていないといけなない。
- 府の施策として英国のエディンバラ市をはじめ、姉妹都市などに留学生を送ることは素晴らしいと思う反面、生徒の間に嫉妬を起こしかねないとも思う。海外留学した生徒が部分的に会話が通用したため「できるつもり」になっていたり、現地のことを「知っているつもり」になっていることも多い。また、文法や発音を忠告しても素直に聞き入れないこともある。英語を学ぶために一部の子どもをお金をかけて海外に行かせているが、京都であれば地の利を生かして、全員でも日常的に練習することもできる。名所旧跡を案内したり、外国人が困っているときに通訳するなどのクラブ活動もある。京都にいなながらみんなが英語を使おうという空気が普遍化できればよい。また、国際的に通用する人材になるためには、会話だけでなく読み書きの能力も重要であり、中高生のうちからTOEFL等に向けた教育も必要である。
- プラン策定後5年間における国の動き、社会情勢、学校を中心とした府内の教育の取組実績について、具体的データを基にした資料を提供してもらいたい。